

ローマントン郊外の岡の上に城趾有り。町より眺め近くに感じたるは樹木等距離の目安になるもの無き故か。其の實往復三時間の道程なれど當地の感覺にては近距離に屬するなり。余も次第に此の距離感に慣れ來れば躊躇はず岡を登り始む。本日午前中の行動豫定なり。

少々は踏み固められつる道らしきものを辿る。丘とは言へどもかなりの勾配有り。見ればN師、其の道には全く拘りの様子無く大いなる岩に向け直行せらる。カメラを持ちたる者其に續く。岩の上に坐し瞑想するが目的なるべし。

若夫婦あり、奥方實に活發にて、かなり急なる登り斜面の處少し道を外れて高山植物寫眞に撮り、景色を眺むる等、大燥きなり。

城趾に到着、嘗ての姿は殆ど留めず。されど眺望素晴し。蕎麥の花の紫がかりたる桃色、菜の花は黄色、青葉と相俟ちて美しく鮮やかなり。景色を楽しみたる後、暫し目を閉ぢ瞑想す。

午後は町に戻り、舊王宮訪れ御當主ジグメバルビスタ氏に面會す。自治王國としてのムスタンは先代の治世に消滅、現在はネパール連邦民主共和國ダウラギリ縣ムスタン郡なり。正門前にて待つ事數十分、先客の西洋人團體と交代に建物内に入れり。木造の階段を四五階登れば元國王の居室に至る。ガイドより各々スカーフの如き布を受取る。其を持ちて一人々々挨拶し布を手渡す。御當主布を受取り其の儘余等の首に掛けて返し給ふ。ダライラマ謁見の様子も斯なるや。御當主は四五十年代と御見受けす。膝に猫を抱く。濃厚なる面立ちなり。余等一行の内ネパール人のガイド最も興奮し感激の様子に見える。N師、翌年の再會約束せられけり。

（平成二十七年四月十八日受附）